令和５年度

大刀洗町自分ごと化会議　答申

「私たちが考える治水デザイン」

２０２４年5月８日

大刀洗町住民協議会

目次

1.　答申にあたって..... 2

2.　住民協議会実施概要..... 3

3.　提案..... 5

4.　付録　委員アンケート結果（抜粋）..... 15

1. 答申にあたって

大刀洗町町長　中山　哲志　様

「自分ごと化会議」に委員として選ばれた私たちは、2023 年 11 月から 2024 年 2 月までの間で全 4 回にわたって「私たちが考える治水デザイン」をテーマに議論を重ね、それらを集約したものを「提案書」として作成しましたので、町長への答申といたします。

「私たちが考える治水デザイン」と聞いてどのようなことを話し合うのだろうかと不安な気持ちで第 1 回目を迎えました。「流域」や「治水」という言葉は、日常生活ではあまり馴染みのない言葉でしたが、多くの人が関わりながら、河川の流域全体で、ハード面・ソフト面の両方を含めた総合的な水害対策であること、さらに、近年頻発する集中豪雨による被害を抑えるためには、行政の取組みだけでは限界があり、私たち住民にも役割があることを理解しました。このことは、私たちにとって水害対策を自分ごととして考えるひとつのきっかけになったと言えます。

委員の中には、集中豪雨で冠水した畑に車が沈没してしまった人、氾濫間近の筑後川や小石原川を見たことのある人、また昭和 28 年の大水害のことを親族から聞いたことのある人から、水害とは無縁の人まで、住民の中でもかなり差がありました。特に水害と無縁の人は、経験がないため水害を自分事として捉えようとはするもののリアリティがないことが、会議の前半の発言に表れていました。しかし、第 3 回のナビゲーターである佐木学さんが三原市で実践されている防災活動をお聞きしたことがきっかけとなって、水害に対する普段からの備えの重要性、特に近所の人たちとの繋がりが被害を軽減するためには大切であることを認識し、「まずは隣組で自主防災会を作るように働きかける」と宣言する委員がいるなど、一気に水害に対する自分ごと化が進みました。

平成 29 年の九州北部豪雨は甚大な被害をもたらしましたが、二度とこのようなことがないように、私たち住民、地域、行政、その他関係者のそれぞれが「普段できないことは非常時にもできない」の言葉をしっかりと胸に刻み、連携して水害に対して備える必要があります。

「自分ごと化会議」は、今回で 10 年目という節目を迎えました。参加した住民は 300 人を超え、日本でもっとも自分ごと化会議の OB・OG が多い町だと聞きました。今期の参加委員の有志で、グループを作って今後も意見交換を続けることにもなりました。

大刀洗町をより良くするためには、住民全員が町の課題を自分ごと化して、行政と一緒に解決策を考えることが大切だと思います。この先もこのような場が続き、私たちの仲間が増えることを願っています。

2024 年 5 月 8 日

大刀洗町自分ごと化会議　一同

2. 住民協議会実施概要

大刀洗町としては 10 期目（12 テーマ目）となる「住民協議会」を実施した。
委員、テーマ及び各回の議論は以下の通りである。

○ 委員

無作為に抽出し協議会委員の案内を送付した数	486 件
応募した委員（応募率）	23 名（4.7%）
参加した委員の数 ・応募した 23 名を選任。 ・抽出とは別に高校生 3 人を追加で選任。	26 名

○テーマ及び各回の議論

テーマ：「私たちが考える治水デザイン」

「流域治水」は行政の専門用語のため住民にはなじみがない。流域治水とは、「多くの人たちが協力して河川の流域全体で行う総合的な水災害対策で、これまでの堤防やダムなどの整備によって氾濫を防ぐことに加えて、被害の対象を減らすための対策や、被害の軽減・早期復旧・復興のための対策」と大刀洗町では定義付けている。

大刀洗町には筑後川をはじめとする河川があり、近年の豪雨により筑後川の氾濫危険水位を越す回数が増えており、水害に遭うリスクが高まっていると言える。このようなことを踏まえ、「流域治水」の観点から、水災害に備えて平時からできること、発生後、被害を減らすためにはどうすれば良いのかについて話し合った。

各回の議論

・第１回会議：2023 年 11 月 25 日（土）
住民協議会の概要説明（構想日本）
テーマに関する説明（建設課）
委員の自己紹介など

・第２回会議：2023 年 12 月 16 日（土）
テーマについて全体で協議
「改善提案シート」の記入　など

・第３回会議：2024 年 1 月 27 日（土）
テーマについて全体で協議
「改善提案シート」の記入　など
ナビゲーターの参加

・第４回会議：2024 年 2 月 17 日（土）
「提案書（案）」について全体で議論
「意見提出シート」の記入　など

〇会議の様子

3. 提案

流域治水を自分ごと化するための提案書

本提案は、各委員が第 2、3 回会議で記入した「改善提案シート」と第 4 回会議で記入した「意見提出シート」の内容及び、各回の協議内容を踏まえ取りまとめた。

提案のポイント

「普段できないことは非常時にもできない」

提案	1.	冠水対策など雨水に対するハード面・ソフト面の整備を進めて、大雨が降っても水害の発生を最大限抑える
提案	2.	避難のあり方など、水害が発生した後の行動を再検討・再認識することで、水害の被害を最小限にとどめる
提案	3.	自分なりの必然を作りながら、今まで以上に水害に対する意識を高める
提案	4.	隣組で防災会を作るなど、地域のつながりによって日頃からの水害に対する備えを一層整える（行動を変える）

提案	1. 冠水対策など雨水に対するハード面・ソフト面の整備を進めて、大雨が降っても水害の発生を最大限抑える

大刀洗では最近７年間のうち６年間は、大雨による床下浸水などの被害が出ている。大雨のたびに、同じ箇所で冠水が起きているケースも多くみられる。冠水により避難所に行くことができないなどの影響が出ているため、行政は、現在進めている農業用ため池の土砂の除去や田んぼダムの整備などを１日も早く完了することが重要である。ただし、行政の対応だけでは限界があるため、私たち住民としても、大雨が降っても被害が起きないようにするためには何をしなければいけないかを常に考えておく必要がある。

「提案１」の実現に向けて、それぞれが行うこと

私たち住民	① 役場の情報を確認する。 ② 冠水した際の別の通路を把握しておく。 ③ 浸透マスを設置する。 ④ 側溝の掃除する。 ⑤ 大雨が予想されるときは、家の周りにある流されそうなものを片づける。
地域	① 行政区内で声掛けをする。 ② 冠水した際の別の通路を共有する。 ③ 浸透マスの設置を推奨する。 ④ どこにどのような側溝があるか認識する。
行政	① 水位の見える化を行う（河川や数カ所の農地にウェブカメラの設置）。 ② 過去の冠水状況の資料配布、映像制作などを行い、ホームページやyoutube チャンネルなどで周知する。 ③ 水捌けのよい素材を使った道路に変更する。 ④ 田んぼの中に大きな道を通して冠水対策を行う。 ⑤ 浸透マス設置補助金を出す。 ⑥ 用水路の蓋を開けることのできるよう軽いものに変える。 ⑦ 透水コンクリートを活用した公共工事や、透水コンクリートを使った住宅工事を行う際に支給する助成金制度を設ける。 ⑧ 河川の流水量を上げるための拡幅工事の実施を検討する（新たな河川を増やし、水の流れを変えることも検討）。

提案

２．避難のあり方など、水害が発生した後の行動を再検討・再認識することで、水害の被害を最小限にとどめる

大雨が降っても水害を防ぐための対策は１．で行ったとしても、ゼロになるわけではない。今後も水害は必ず起きることを念頭に置いたうえで、いかにして被害を最小限にするかを考えることも重要となる。特に避難のあり方について、委員の中には避難所に行ったことがない人も多くおり、住民全員が水害発生後の行動が自分ごと化できているとは言い難い。早めの避難行動や自宅での垂直避難など、水害が起きた時の行動についての平時からのシミュレーションが、災害を最小限にとどめる最も重要なツールと言える。

「提案２」の実現に向けて、それぞれが行うこと

私たち住民	① 早めに避難所に行く。 ② 避難所体験をしてみる。 ③ 避難場所・避難経路を把握する。避難方法を家族で話し合う。 ④ 危険を感じるときは動かない（緊急車両などの障害にならないようにする）。 ⑤ 自宅で避難する際に必要なものは何かを考えてみる。 ⑥ 知人や親戚のもとへ避難する。 ⑦ 避難時に備えて、防犯カメラを設置する（避難時の防犯のため）。 ⑧ 雨雲レーダーをチェックし、早いうちに車を高台に移動させる。 ⑨ 避難所アプリが導入されたら、アプリの内容やメリットを把握し、事前に登録して災害に備える。
地域	① 体験型の避難訓練を地区ごとに設ける（年に１回は行う）。 ② ハザードマップを確認し、行政区内で声を掛け合う（地域の現状がハザードマップに反映されているかチェックする）。 ③ 避難するとき、近所に声かけをするなど、地域の方々と協力し合う。 ④ 避難しない人がいたら班長や区長へ連絡する。 ⑤ 災害発生時、地域で状況を把握し、公民館を開放するなどの対策をとる（区長の判断で開放できるよう権限を持たせる）。 ⑥ 避難時に交代で見廻りする。 ⑦ 防犯のため、避難が完了した地区には人が入れないようにする（例：地域主導で道を通行止めにしたりする）。

	⑧　一人暮らしの高齢者や障害を持つ人がいる家をチェックする。 ⑨　避難所アプリが導入されたら、地区の回覧板に登録用の QR コードを載せ事前登録を促す。住民が集まる催しの際に説明会を行い、高齢者にも登録を促す。
行政	①　全町民を対象とした避難所体験（段ボールベッドや仕切りの組み立てや避難所には避難時に持ってきてもらいたい物を展示）の実施や無作為抽出で対象者を選び、避難所宿泊体験を実施する（実施するための予算を確保する）。 ②　区長や民生委員など皆で話し合いコミュニティを活性化することで、皆の避難意識を高める。 ③　避難を周知する際、見やすい・わかりやすい指示や案内を出す。 ④　防災無線を活用する。 ⑤　避難所で使うアプリが大刀洗町で使えないことや定点カメラの数が少ないなどの課題を解決するために、事業者と協働して大刀洗町のアプリやシステムを作ってもらう（避難所アプリの導入、過去の災害について事例を用いてアプリの重要性を訴える）。 ⑥　避難所を早めに開ける。 ⑦　避難所に防犯カメラを設置したり、自宅用の防犯カメラ購入補助金を導入する。 ⑧　災害時に警備員を雇用し、避難所やまちなかの巡回を行う。 ⑨　災害種別ごと（台風、水害、地震など）に適さない場所はリストから外す。 ⑩　自宅での垂直避難など「避難所だけが避難ではない」を具体的に周知する。 ⑪　ハザードマップのバナーを大きくホームページに載せる（ホームページの更新を怠らない）。 ⑫　災害時に必要な物や行動などをまとめた小冊子を作成する。 ⑬　避難所設営のために必要な新たな備品を用意する（避難者同士のプライバシー保護のため必要になる段ボール仕切りや体育館に設置できるドーム型のテントなど）。 ⑭　公共施設の会議室や空きアパートを避難所として活用する。 ⑮　抜き打ち避難訓練を実施する（会議開催時など）。

提案　３．自分なりの必然を作りながら、今まで以上に水害に対する意識を高める

委員の中には実際に冠水被害を経験し命の危険を感じたという人もいれば、川から遠く冠水も起こらない地域にいて水害が他人事に感じてしまうという人もいて、水害に対する意識にばらつきがあった。水害経験のある地域に住む人はもちろんだが、そうではない人も、被災した人を短期間受け入れるなど関わりを持つことはたくさんある。「普段できないことは非常時にもできない」との考えを住民全員が持ち、平時から水害についての知識や情報を十分に得ておく必要がある。その際、いかに日常生活の中に水害を意識させるモノやコトを作れるかが大切になる。例えば子どもや楽しみなど、自ら「必然」を作ることで、自然と水害についての自分ごと化が進む。

「提案３」の実現に向けて、それぞれが行うこと

私たち住民	①　水害に備えて備蓄物などのことを家族で話し合う。 ②　水害や防災について学べるセミナーなどのイベントに参加するなどして情報を集め、体験する（知ること、知ろうとすることが必要）。 ③　配布資料の冠水写真を見せて近隣の住民と話し合う。 ④　防災教室や定点カメラなど町が行っているイベントや仕組みを把握する。 ⑤　実際に水害などの災害を経験された方に話を聞く。 ⑥　子ども達を巻き込んでイベントを実施する（何かしらの情報が得られる）。 ⑦　子ども会や自治会でのイベントの時などに、水害の話題を出す（意識調査にもつながる）。 ⑧　HP が整理され次第、どこを見たらいいのか、近所の高齢者に伝える。 ⑨　大雨時に、現在の状態や今後の予想についての情報を積極的に収集し、町役場の発する情報をチェックし続ける。 ⑩　防災のアプリを利用したり、町の LINE を使うなど色々試してみる（LINE を使って情報発信ができるよう、住民から情報収集を行う）。 ⑪　LINE を使った防災意識調査にはしっかりと回答する。 ⑫　平時から何事にも問題意識を持つ。
地域	①　地区行事の中で、防災士または消防団の人から水害の対策について教えてもらい話し合うようなイベントを検討する。 ②　防災訓練やセミナーを楽しみながら参加できるよう工夫をする。 ③　企業を巻き込んで、テント利用や炊き出しなど体験型のイベントを行う（地

	域のコミュニケーションの場にもなるし避難した際の実体験ができる)。 ④ 行政区を細かく区切って、そのエリアの状態や状況に応じてどう行動したら良いかや避難の基準などを発信していく。 ⑤ 大雨や台風の予報が出そうなときは、地域全体の点検・整備をする。 ⑥ 区長や防災士、消防団と協力して、子ども会なども巻き込んで災害啓発イベントを行う。 ⑦ 防災のことについて、寄合などで話し合う。 ⑧ 本郷ふれあいセンターを活用しながら散歩によって水路がどこを走っているか、大雨が降るとどこが危ないのかなどを確認する。 ⑨ スマホを使わない高齢者を助けるネットワークを作る。 ⑩ チャレンジ教室を利用して子どもたちや親、地域の防災意識を高める。 ⑪ 地域の水害対策の活動を行政に報告する。
行政	① ドリームまつりやハンドメイド市場など、地域の特産物を売買できたり人が集まる時に体験会を行う。また、親子で参加する学校行事などで避難所体験教室や防災訓練を行う。NPO や企業の巻き込みも考える。 ② 佐木さんのような方を招いての講演会を行い、日常の備えについて住民に分かりやすく伝えたり、楽しんで防災を学んでもらう。 ③ 住民が自主的に企画した防災イベントに対して補助金や広報の協力をする。 ④ インスタや公式 LINE を活用して防災情報をバンバン宣伝する(面白そう！参加してみたい！と思わせる企画)。 ⑤ 災害に応じて開設されない避難所もあるなど、定期的に町広報誌等を通じて災害に対する意識を持てる記事を出していく。 ⑥ ハザードマップや定点カメラなどの情報をもっと見やすく掲載する。 ⑦ 住民がよく利用する場所(スーパーやコンビニ等)に、その周辺の情報を発信してもらえるよう依頼する(この周辺の避難場所は〇〇です等)。 ⑧ AR（拡張現実）機能を使った「ここまで水は上がってくる」アプリみたいなものを作り、危機感を住民に持ってもらう。 ⑨ 防災に関する危機感を持つような回覧板を回してもらう。 ⑩ 炊き出しなど避難訓練を実施するための予算を確保する。 ⑪ 回覧板などで QR コード付きで防災意識調査を行い、ポイントの付与などの運用を検討する。結果を回覧板で提示し、さらに意見を求める(ポイント制)。大喜利のように、良い意見にはポイント付与や賞をつけたりする。 ⑫ 情報の発信を早急にできるよう、さらに工夫する。 ⑬ もっとピンポイントに町内のリアルタイム情報を見やすく整理する（web 情

		報やアプリはたくさんあり判断が難しい。定点カメラも見たことがあるが、筑後川は見られたものの近所の川ではないのでよくわからなかった。家の周辺の通行止めが解除されたのかも行ってみないと分からなかった）。
	⑭	行政側に住民から情報発信できるように LINE を改善する。また、防災意識調査に LINE を活用し、結果を検証する（予算を確保する）。
	⑮	小中学校に防災意識向上のための資料配布する。一緒に防災食を配ったりして、さらなる防災意識向上を図る（高齢者には、スマホを使いこなせない方もいるため、紙で配布する）。
	⑯	太陽光発電、蓄電池設置を促すために補助金を検討する。
	⑰	町庁舎屋上など公共施設の太陽光発電パネルを設置し、災害時に備える。
その他	①	テレビで平時と災害時の比較映像を流し、水害を身近に感じてもらう。

提案 ４．隣組で防災会を作るなど、地域のつながりによって日頃からの水害に対する備えを一層整える（行動を変える）

三原市小坂町の事例を聞く中で、水害被害を最小限に抑えるためには、町、行政区、隣組、親戚、家族など、様々なコミュニティでいかにして助け合えるかがとても重要であることがわかった。大刀洗町は近年、転入者が増加傾向で、つながりが希薄になってきている地域があるとの意見が多く出た。このことは、水害発生時の共助が十分に機能しないリスクがあるとも言えるため、挨拶をはじめとして日常的なつながりを深めていく必要がある。まずは、隣組単位から防災会をつくることから始めていきたい。さらに、高齢者や障がい者など、避難時に介助が必要な人を地域で把握しておいて、いざという時にみんなで助け合える環境を整えておくことも大切である。

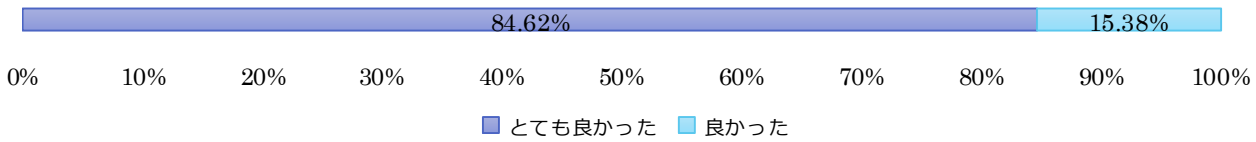
「提案４」の実現に向けて、それぞれが行うこと

私たち住民	① 自宅のふろ場などに雨水をためる工夫をする。 ② 家電製品の電源をこまめに切る。買替え時は消費電力の少ない機種を選ぶ。 ③ 太陽光発電や蓄電池の設置をする。 ④ 自分たちの避難場所を確認しておく。 ⑤ メディアやインターネット等で災害の情報を知り、非常時の行動をシミュレーションする。 ⑥ 水害に備えて持ち出し袋や備蓄品などの準備をする（浮き輪も)。また備蓄品の確認日を設定して、買い替えなどを行う。 ⑦ 隣組や子ども会、学校行事など大刀洗に関わる行事に積極的に参加し、地域の方との距離を縮めて、どこの誰というのを明確に把握できるようにする。 ⑧ 散歩などしながら近所の方々と挨拶をしながら少しずつコミュニケーションを取り、継続させる（普段から外に出ないため周囲との接点がない)。 ⑨ 防災活動を主とする機関を作り、長を決める。 ⑩ 先立って地域で備えをすべきと感じたため、隣組単位で防災会を作る。
地域	① 災害時にお互いで協力できるように日頃から近所や組合の方々と良好な関係を築いておく（区内でお互いの顔を知る)。 ② 隣組で手助けが必要な方を把握する(要介護者、高齢者、小さい子どもがいる人、外国籍の人)。 ③ 地域みんなで防災に関する取り組みを盛り上げる雰囲気作りを行う。 ④ 新しく大刀洗に引っ越してきた世帯へも町内会への加入や地域行事への参加

	を呼びかける。 ⑤ 隣組中心に（10 軒程度）防災会を設置する（例えば、声掛けを行う水量計の目盛りの位置や、災害が起きた際の食料備蓄や排水溝定期清掃などの取り決めを作る。 ⑥ 防災ネットワーク作りをするために、飲み会を開く。 ⑦ 備蓄品確認日に地域で持っている備蓄品の確認を行う。
行政	① 備蓄品の購入や水量計の設置などの予算を確保する。備蓄品は避難所になるところに保管しておく。 ② 備蓄品の確認日を設定して、住民・地域などと協力して確認を行う（備蓄品の内容の公開など、防災特集を広報紙に組み、防災意識を高める）。 ③ 地域のコミュニティが薄いところは行政が関わって活性化の支援をする（商品券の付与などインセンティブを付けることで地域の中心になってくれる人をサポートする）。 ④ ドローンを購入する（災害時の避難者捜索や孤立地域の物資配送に使用）。 ⑤ 小学校に井戸を作る。 ⑥ 町内にある井戸を災害時に使えるように所有者と協力体制を築く。 ⑦ 防災士の資格を取るための助成をする。 ⑧ 介助が必要な人の場所の地図を作る。 ⑨ 隣組長に介助が必要な人（高齢者や障がい者など）の情報を提供をする（個人情報のハードルもあるかもしれないが普段から気にかけることができる）。 ⑩ 高齢者世帯や子どもがいない世帯は新しく入って来た町民と交流できる場所がないため、行政主導で交流の場を作る（今は町で生まれ育った町民と他の地域から引っ越しして来られた町民との間の交流があまりない）。
その他	① 企業が有事の際の船（ボート）を用意したり、防災のためのグッズを提供する。

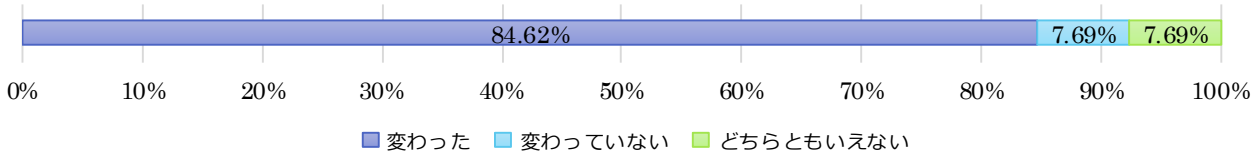
4. 付録　委員アンケート結果（抜粋）

〇自分ごと化会議に参加されていかがでしたか？※回答者数 13 人



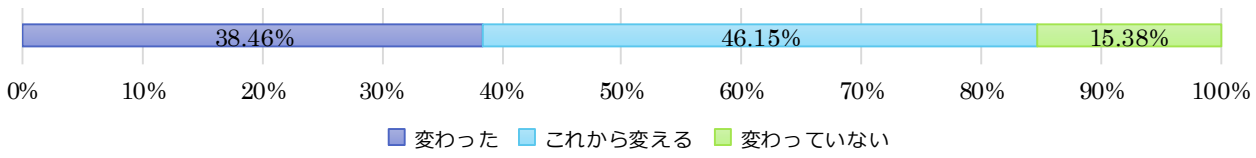
- 4 回全部参加できた。自分ごとで、毎月の楽しみにもなっていた。
- 今回の会議治水デザインは毎年起こる事なので毎年、住民会議をしても良いと思う。
- 流域治水のことを自分ごととして考えることがなかったので、良いきっかけをもらえた。
- 自分では思いつかないような考えを聞くことができて自分の考えを深めることができた。
- いろんな世代、地域の人達の話を聞けたから。
- 初めは、なんとなく参加していてけれど、回を追うごとに意見を発表する委員の方々の熱量が上がっているのを感じ、2 回目の会議に参加出来なかった事を今更ながら悔やまれる気持ちになっている自分がいる程の体験をさせてもらえた。
- 改めて治水を考えさせられました。
- 防災に対して自分自身の認識が深くなった。

〇会議に参加したことで、意識に変化はありましたか？※回答者数 13 人



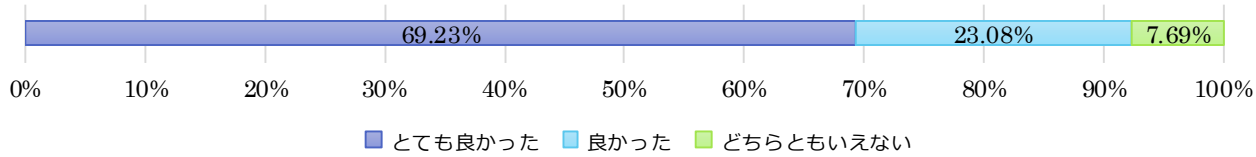
- きっかけの場を与えてもらったと思う。
- 以前住んでいた地区も現在住んでいる地区もあまり水害がある所ではないのですが、以前住んでいた地区の避難所が水害時は開設されない避難所であった事を今回初めて知り私の中で少しショッキングな事だった。ハザードマップなどをもう少し自分ごととして確認しようと思った。
- 会議を通して治水に関しての知識は増えた。
- 今まで全て行政に頼っていたけど自分らでも何か出来ることがあると分かった。
- 自分ができる事や地域への関わり等を考えるようになった。
- 他人事にしないで、自分ならばと考えることができるようになった。
- 大雨などの災害を自分ごととして考えるようになったから。

〇会議に参加したことで、行動に変化はありましたか？※回答者数 13 人



- 家の壁に防災マップを張ったから。
- 気象状況が気になるようになった。
- 水害時の脱出用ボートの設置を考えた。
- まだ行動に移せていないけど、これから避難所を確認したり家族ともし災害が起きたらどうするかなどの話し合いをする。
- 家族での話し合いなど、決め事などをまとめていく。
- 今すぐ出来ることが少ない、後回しになっているのが現状ですが気持ちはある！笑
- 自分の考えを即実行は中々出来ないので少しづつ変えていこうと思う。

〇今回のテーマ「私たちが考える治水デザイン」は住民が考える内容としてどう思われますか？
※回答者 13 人



- 『治水』という聞き慣れない言葉に会議に参加するかを迷いましたが始まってからは、とてもわかり易くお話しいただいて自分にも無関係ではない大切なテーマだと理解できた。
- これまで何度も大刀洗町に水害が来ていて、これからも多分来るだろうから現在に沿ったいいテーマだと思った。
- 佐木さんを招いての講話がすごくよかった。また、話を聞きたい。
- 最初は何のことかわからなかったけど、回を追うごとに自分たちのことに繋がっているんだと思えた。
- 実体験や他人事の色々な意見はその地区だからこその意見であり、色々な地域で生活する住民の意見は大きいので、とても良かったと思った。
- 若い方が真剣に考えていることがとても良かった。
- 水害、冠水は毎年のように見られるのでテーマとしては良かった。

〇あなたにとって今回のテーマにおける「自分ごと化」はどのようなことでしょうか?※回答者数 13 人

- 一歩を踏み出す勇気。
- 横の繋がりを大切にする事を小さなところから始める、何かあった　時には声を掛けられる勇気と関係を築くことです。ただ…今のご時世ですので個々のプライバシーを守りつつ「繋がって行こう！！」から始められたらいいな！
- 個人、地域、行政の立場にそれぞれ自分が立ってみて自分ならこうするということを考えられるもので、他人ではなく自分の事として受け止められる事。
- 自分だったら、自分ならを考える事。
- 自分は災害にあわない、私は大丈夫と思うのではなく災害にあったらこうしよう、災害が起きる前にこうしておこうとあらかじめ話しておくこと。
- 防災に対する危険度を認知する。
- 様々な情報がある中で、しっかりした物を正確に自分で選別して考え、取り入れ、行動する。

令和５年度大刀洗町自分ごと化会議委員

坂田　美咲	原　憲志郎	宮原　秀一
古賀　哲郎	土山　美穂	實藤　俊彦
石田　滋博	熊谷　希世	中村　ひとみ
棚町　浩介	熊谷　信子	實藤　啓人
古賀　美樹	平田　康子	中原　佳子
平田　隆	髙﨑　隆	平田　昌子
平川　晃子	山城　理香	池田　紗世
井上　岳志	松友　優美	平河　陽菜
青木　美穂	大石　ひとみ	―

※掲載に同意いただいた委員の氏名を掲載

構想日本

＜コーディネーター＞

・伊藤　伸　（構想日本　総括ディレクター）

＜ナビゲーター＞

【第３回】

・佐木　学（防災士、三原市小坂町防災会会長）

＜オブザーバー＞

・熊井　教寿（国土交通省 筑後川河川事務所）

・徳永　久美恵（国土交通省 筑後川河川事務所）